

# 双松会会報

第五号(「双松」通巻11号・「松高北高同窓会報」通巻第13号)

発行 松江市奥谷町164  
島根県立松江北高等学校内 双松会事務局 TEL ④4888・⑤3633  
印刷 有限会社 高派印刷所 TEL ④3000



## 年よりの冷や水

会長 柴田 午郎

いつも気にかかっている問題だが、四十開堀の水を市役所付近で、もっと効果的に宍道湖へ流し、北高グラウンドの埋立を可能にする、土橋水門の工事、大きな経費を費して、ほぼ完成したとき。

ところで今年雨が少なかったが、梅雨明け前に、一度だけかなりの増水があり、床上浸水騒ぎなどなければよいがと案じていたところ、情報によるとこの度は一夜にして水がひき、何事もなかったとき。

これはこの度の工事の結果、排水ポンプの威力があらわれたものと思われ、第二グラウンドの埋立問題にも有力な手がかりを得たのではないかと喜んでゐる。或いは私のひとり合点かもしれないが、専門家の意見もきき、更に県や市当局の強力な協力をお願いせねばならない。

またこれも素人考えと笑われるかもしれないが、北高と南高が分離して以来、大学合格率の問題とか、スボ

ーツの成績等について、だんだん両校の競争意識が強くなっていく事は事実である。これは当然のことで、お互い善意の間はむしろ好感をもって迎えられるが、年を経るに従って、先生にも生徒にもその意識があまり高まってくると、むしろ弊害の方が多くなることを懸念するの頃である。

大学への合格率などを強く意識することは、以前にはなかったことだが、だんだん雲が細かくなってくるのは、学校教育の問題だけでなく、社会の風潮ともいえる。しかし学校教育だけはこの弊害を受けてほしくない。更に問題は東高の施設である。三校が三派に分れて、ライバル意識をもつようなことでもなれば大変である。

要は意識の問題か、運営の問題か。識者の善処を期待したいところである。双松会という特殊な立場から見ると、こんな無用なことなど発言したくならない。年よりの冷や水というものであろうか。

## NHK全国学校音楽コンクールで最優秀校となる

合唱部 今年も大きな期待が

月日のたつのは真に早いものです。NHK全国学校音楽コンクールにおいて、最優秀校(全国第一位)を受賞して、もうすぐ一年めを迎えようとしています。そして今年も今やコンクールのシーズンだけなわ。昨年のメンバーが半数近く残っているとは言え、毎

### 昭和五十九年度 第一回役員会開催さる

今年度の役員会は、常任監事約七十名のうち、五十余名の出席を得て、五月二十五日、一文字屋ホテルを会場に開催された。

会議は柴田会長、三浦校長の挨拶に続き、会務報告、五十八年度会計決算承認、五十九年度予算審議が行われた。会の後、懇親会が開かれ、懐旧談に時の経つのも忘れて、若い日を語り合う楽しいひとときを過ごして閉会した。なお会務報告等は二面に掲載しています。

### 「同窓会名簿」発行についてお知らせ

準備は完了いたしました。発行の準備を進めております。このたびはご協力をよろしくお願いいたします。発行の準備を進めております。このたびはご協力をよろしくお願いいたします。発行の準備を進めております。このたびはご協力をよろしくお願いいたします。

## 文武両道

学校長 三浦 富 登

先日東京のある建設会社の中堅社員として活躍している教子から、近々のうちに仕事のことについて話を聞きたいと申し出て、なつかしい昔話を交えて、卒業以来二十年ぶりのこと、一時が過ぎるものと期待していた。ところが彼の話は、私の予想に全く反して、会社の方で大学受験用の教材を開発したので受験生にPRしてほしいとのことであった。

彼はこれまで建設業の仕事一本に打ち込んできた筈なのに、どうして受験産業に転向したのか不思議に思っていた。彼が言うには、昨今建設業界の景気は低迷続きで、会社では苦境の打開策として若手社員にさまざまなアイデアを出させ、採算の可能性が見込まれるものについては、資本を除いてすべて若手社員にまかせ、当節はやりのアドベンチャー・ビジネスの一つとしてやっているとのことであった。

私はこの話を聞いて、あらためて民間企業の企業戦略のすさまじさと、企業に働く人材に求められる要件というものについて深く考えさせられた。ご承知のように、本校では毎年三年生の約七五パーセントが国立公立大学共通一次試験を受験する。これは、七〇パーセントの三年生が出席する高校が全国の高校数五、六〇〇余の〇・四パーセントしかないことと対比すれば本校の位置づけがおおよそ判りいただけると思う。本校が世に進学校と言われる理由の一つはここにある。そして、生徒一人ひとりに当分の目標のある大学に合格させるためには、現行の大学入試制度が変らない限り、教科の学力の充実を重点として取り組まざるを得ない。保護者も生徒も現実問題として本校の教育にそのことを期待している。

ところが前述の例からも推察されるように、社会に出て働く人間に要求されるものは学力以外に意欲や創造力、そして、変化に弾力的に対応していく力などを含めた総合的な資質である。このような資質は、教科の指導のみ

で期待できるものではない。生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、その資質の向上をはかるためには教科の指導と同時に、教科以外の教育活動にも重点をおいて積極的に取り組む必要がある。大学入試の現実を十分承知の上で、あえてそのことのために一辺倒になることなく、両面倒を生徒に強く求めていく理由はここにある。

昭和三十年頃四五パーセントであった本県の高校進学率が現在九四パーセントに近づいていることからもわかるように、最近には実に多様な生徒が入学している。本校においても高校進学を目的とするものだけでなく、学習以前の生活態度そのものに問題をもつ生徒などさまざまである。そうした生徒は当然のことながら、その他の生徒にとっても本校の教育はきびしいと受とめていくようである。しかしながら、これからの長い人生を生き抜くために備えておかなければならない資質というものは、その理解のうえには必ずしも言えないかも知れないが、入学後は本校生であるとの自覚を次第に身につけて、教職員が一体となった指導によって教科

の学習と教科以外の活動の両立によって自己を高めようとする努力を続けている。一体、生徒をして、そうせしめる原動力はどこにあるのかとの質問を多くの学校視察者からうける。私はいつも「百有余年の伝統、すなわち文武両道の教育方針」であり、「それによって育ち、大成した先輩に続け」ということであると答えている。

先に述べた両面倒の教育という指導観のもとに教職員が一体となり、生徒が本校生であるとの自覚を自然に身につけていくのも多くの先輩によって培われ、赤山の台地につかりと根をおろしている文武両道という輝かしい伝統のたまものである。これからの先輩の指導、ご支援のもとに時代がいかにも変わろうとも、どんな社会で生きようとも、強く生き抜いていく人間をつくりたいと思う。

二本松の亭々たる風姿を仰ぎ見る度に、「雄気堂々、斗牛を貫く」という詩句を思い起こす。天上の斗牛の二星をも貫くような、その毅然凛乎とした樹容の風格が、時流を越えて、無言のうちに、どれだけ「質実剛健」の気風をはぐくんできたことか。そんな思いに駆られることしきりである。その二本松が、病害虫にも冒されず、今夏の早秋にも耐えて、翠色も濃く、すばらしい緑陰をつくってくれている。これも、双松とこしえなれと願う卒業生の方々の切なる思いに対する天の感応、配意であろうか。今年度も、周辺の樹木を含め、剪定、消毒、施肥等には年間約八十万円を計上し、その管理には細心の注意を払ってきた。本欄「松くい虫」の名称もマツノマガラカミキリに対する逆封じになるかも知れぬ。それはともかくとして、今春も今夏もこの二本松のもとでの多くの諸先輩の集いがあった。五月には第49期、第54期のそれぞれ八名の同窓の方々を迎えた。何れも、低徊しては往時を偲んで語り合われ、感慨も一入のように見受けられた。

ところで、来年度は五年に一回の同窓会名簿「双松」の改訂発行の年となる。今回は、名簿印刷の際、コンピュータを導入して、たとえば、部(クラブ)別会員、地区別会員等、各種のデータを入力し利用の便をはかるつもりである。来年十月の発行予定であるが、お手許に備えられて御活用いただくよう、お願い申し上げます。さて、今春の大学入試では、昨年度に比し私立大合格者は大幅増、国立大合格者は、ほぼ同数の好結果であった。来春は、一層の充実、向上を実現したいものである。一方、部活動では、六月に行われた県高校総合体育大会で好成績を獲得したものの、昨年度の総合優勝を持続できなかったのは無念であった。発憤、奮起あるのみである。盆を越しても例年ない酷暑である。生徒も先生も汗を流したたせながら、演習授業に取り組んでいる。起雲館を使っている各部の合宿練習は終わったが、練習日は殆んど部で八月末まで続く。勉強でも、部活動でも、「雄気堂々」でありたいものである。

## 松くい虫

二本松の亭々たる風姿を仰ぎ見る度に、「雄気堂々、斗牛を貫く」という詩句を思い起こす。天上の斗牛の二星をも貫くような、その毅然凛乎とした樹容の風格が、時流を越えて、無言のうちに、どれだけ「質実剛健」の気風をはぐくんできたことか。そんな思いに駆られることしきりである。その二本松が、病害虫にも冒されず、今夏の早秋にも耐えて、翠色も濃く、すばらしい緑陰をつくってくれている。

近畿双松会創立25周年便り

事務局長 内田 礼治郎

昭和五十八年十一月二十四日(木)、近畿双松会創立二十五周年記念(銀婚式相当)を兼ねて五十八年度総会が大阪南の「鳥菊南店」大会議室において催された。

現在約三百名の会員である。年間会費二千円宛頂き運営されている。毎年春には行楽会あり、家族連れで楽しい集いを持ち、相互の親睦を計り、秋には定期総会兼忘年会を開く。

初めに馬場義人大会委員長(58期)開会を宣し、型の如く議事進行。席上本会功労者表彰もあり、米村顧問(34期)、山根会長(46期)、松本副会長(49期)、内田事務局長(49期)の四氏に対し、満場の拍手裡に感謝状が贈呈され、更に記念品として、京都の河井武一氏(47期)力作の花瓶が贈られた。

つづいて大広間で宴会に移り、記念品として全員に八雲塗はがき箱のプレゼントもあり、それぞれに積る話に花が咲き、また有志の「山本いづみ」さんのシヨウもあり、記念総会にふさわしく盛り上った。

最後に神戸市助役宮岡寿雄氏(67期)の発声にて万歳三唱し閉会した。本会は今も昭和初頭に始まり、故四方田保氏(20期、弁護士)が中心となられ、熱心に運営されてきたが、大戦のため解散状態となり、戦後四方田氏が再興を發起されて、昭和三十三年十月二十五日に再建総会が開かれ、再建初代会長として永岡孝二氏(42期、当時近鉄専務、現在名誉会長)が就任された。

四十三三年十月七日には十周年記念大会が大開園にて盛大に開かれ、永岡会長及び横山事務局長(55期)両氏の十年間に渡るご尽力に対し感謝状が贈呈された。つづいて今回の二十五周年大会に及んだ次第である。本会は近畿二府四県在住の、旧制松江中学卒業生及びこれに準ずる者の内、有志をもって組織された任意団体で、



左より米村顧問、松本教頭、山根会長、足立先生

昭和58年度双松会会務報告

Table with columns for date, location, and attendance. Includes entries for Tokyo and Misaki branches.

昭和58年度 双松会会計決算書

Financial statement table for 1983 with columns for item, budget, actual, and increase/decrease.

昭和59年度 双松会会計予算

Financial statement table for 1984 with columns for item, budget, previous year, and increase/decrease.

Table with columns for item, budget, actual, and increase/decrease. Continuation of financial data.

Table with columns for item, budget, previous year, and increase/decrease. Continuation of financial data.

ああ！山本幡男君 (その二) 松中46期 田平 式 大正十年隠岐の黒木村から山本幡男という少年が松江中学校へ入学した。

書き数え歌を書いて「これでどうだ！ワッハッハ」と人を笑わせ得意がっていた。一つとや人並低いが原真さん、論議や孟子は古臭い。二つとや二つ古いが富公さん、アタキヤ・テゲン(手段)が大好きよ。

十とやとうとうお仕舞は金仏さん、色は黒いが良い校長。当時赤山の名物先生を知る者は、名物の先生の特徴をうまく歌い込んでいたのに感心する。

百年史補遺 (四) 漕艇部(その三)

昭和二十六年は、松江中学に入学した最後の生徒(松高三期生)の年である。その前年の秋、赤山を下山し、松中時代のボートを継承した生徒としては最後になったので、ボートの関係者は本年こそ全国制覇を果さんと、生徒の指導に熱を入れ、コーチには前年度の主将で同志社大学に進学した黒田方辰を当て、C野津宣弘、S高橋榮志、5吉岡勇、4今岡一郎、3折坂興、2鈴木博也、B加藤祥司でクルーを編成した。琵琶湖の全国高校大会は三井寺下の大練寺に宿泊し、前年までのコーチ湯浅義男氏も東京から選ばれて、望んだ。その年関西で圧倒的な強さを示している京都伏見工高に準決で敗れ、遂に先輩が手にした優勝旗をものにすることは出来なかった。琵琶湖で苦杯を喫したクルーは、必ず国体でこの仇をとると決意、夏休期間を同志社大学加藤卓嗣先輩を特別コーチに据え、特別を行った結果、クルーは順調に成長した。しかし、その頃、境高校からの申入れで、大橋川で練習試合を行った。これはコンディションの問題もあったとしても、余りにも出来ずであると感じた選手は、国体までの最後の十日間、必死の練習を行い広島宮島口コースに出漕した。予選で地元甘日市高に半艇身と苦戦したが、二次予選で愛知旭丘など、更に準決勝では優勝候補の宮城塩釜高を一艇身半で破り、決勝で宿敵伏見工、秋田本荘高、福島喜多方高との対戦となった。スタート直後は予想どおり伏見がリード、これを他の三クルーが並び乍ら追いついた。この三クルーが並び乍ら追いついた。この三クルーが並び乍ら追いついた。この三クルーが並び乍ら追いついた。

総合体育大会終わる

六月上旬に県内各地で開催された高  
校総合体育大会に、本年は北高から三  
百八十名の選手が出場しました。

昭和五十九年度 総体育成績一覧

Table with columns for sports (e.g., 男子K F, 女子K F, 水泳部) and lists of participants with their respective ranks and names.

今春の進路状況

赤山精神健在なり

Table showing enrollment statistics for various schools (e.g., 国立大, 公立大, 私立大) across different years (56, 57, 58, 59).

通信制役員会報告

坂本育穂

昭和五十九年度通信制同窓会役員会  
が去る七月二十二日(日)松江市中原  
町「婦人会館」で行われた。会則を改  
正して総会と同じ機能を役員会に持た  
せるようになってから三回目の役員会  
である。

先ず三年の任期が切れた役員改選に  
ついては事務局より藤原会長、徳田、  
野津両副会長の再任を提案、承認の後、  
藤原会長より前理事及び監事全員の再  
任を求める案が提出されこれも承認さ  
れた。なおこの内、加藤未鳥(石飛郁  
子)、正子(祝部仁子)、山本敏明  
(三島勝美)の三氏はかっこ内の前理  
事より後任に推せんされた理事であ  
る。

「文武両道」  
「質実剛健」ま  
ずこの校訓か  
ら北高教育は  
スタートし、  
赤山で学ぶ生  
徒たちは、三  
年間の青春を  
力の限り燃や  
して赤山精神  
を己の次の出  
発に見事に体  
現していきま  
す。今春の進  
路状況は別掲  
の通りでした。  
今年も、先  
輩の皆様が營  
営として築き  
あげられまし  
た赤山精神を  
立派に開花さ  
せてくれまし  
て。然もそれ

は類まれな大輪の花、を一段とた  
くましく充実させてくれたと信じます。  
六月の県総体男女総合優勝、合唱部の  
歌声は全国にひびき、NHKの合唱コン  
クールでは全国最優秀の栄誉を母校に  
もたらしました。この快挙をうけての  
進路決定、就職に、進学に最後の力を  
ふりしぼっていただきました。三年生ま  
で部活を、主将として、中心選手とし  
て、裏方のマネージャーとして黙々と  
耐え忍びできた部員諸君の中に、今年  
はとりわけ国立公立大をはじめとして多  
くの大学へ合格者をみましましたのは、特  
筆に値することだと思えます。  
質量両面の充実を重要な課題として  
生徒諸君のたいなる飛躍前進を念じて  
いますが、今年も反省すべきことは多  
多ありました。改めるべきことは即時  
改め、校訓にそった進路指導のあり方  
を真剣に追求したいと思えます。  
就職に關しましては、依然としてき  
びしい状況にあります。昨年もお願  
いをいたしました。どうか変わらませ  
ず卒業生の皆様の御指導、御支援を切  
にお願いする次第です。  
卒業生の皆様の御発展、御活躍を心  
からお祈りします。

だという決定がなされていたことに鑑  
み、会長より十名の増員を希望し、そ  
の内訳には集団の卒業生を考慮したも  
のであること、の説明があつてこれも  
承認された。  
この結果役員総数は理事二十九名、  
監事二名となり、内訳は一般生十六名  
(監事二名を含む)、日立三名、大和紡  
三名(都築、鐘紡、那是で現在は募集  
停止)、松江衛看、出雲衛看が各二名、  
益田衛看(現在募集停止)、能義衛看、  
雲南衛看各一名となつた。  
続いて五十八年度決算については野  
津副会長より説明、伊藤監事より監査  
報告があり審議に移つたが格別の問題  
もなく承認された。このなかで主なる  
ことについて言及すれば、収入は五十八  
年度卒業生八十五名の終身会費が殆ん  
どを占める。支出のうち、地域会議費  
であるが昨年は出雲支部と日立五十二  
年卒業生の同窓会が二回開かれてい  
る。

介してみると、「一、同窓会の出席者の  
少ないことについて開催日の検討も含  
め、もつと「同窓会」自体の宣伝をし、  
卒業生相互のつながりを深めていこう。  
二、(生徒である)出雲支部への応援  
人数も減っているので支部行事のバツ  
クアップをしよう。三、以後の「出雲  
同窓会」をどうするか。一七〇通の案  
内状を出しても返信は半数以下で出席  
者はそのまた三分の一。どうしたら  
いだろう。」  
当事者のこの切実な気持ち、事務局  
としても実感として胸にジーンと来る。  
本当にこうなんだものね。  
ところで一方、日立五十二年生はど  
うか。「昨年以來久々の同期生会で多数  
の出席者があり盛大であつた。現在既  
婚者十一名。最後に残るは果して誰や  
ら、どの話題も飛び出した。来春に  
も二三人の予定があるらしい。同期  
生会に対して事務局よりの補助が朗報  
である。」  
これはやはり集団の強味、しかも日  
立のこの利である。なお、日立のこの  
期は今年七月、既に同窓会を行つたと  
いう報告も来ている。

学園祭を  
ふりかえつて

生徒会顧問  
高橋 栄

今年の学園祭は「君の未来を問う」  
という統一テーマのもとに九月七日  
九日(体育祭の一部は雨のため十日に  
延期)の三日間にわたつて行われた。  
始めの二日間は文化祭である。これ  
は、講演、各文化部の発表、弁論的行  
事、映画会、二年各ルームによる出し  
物、食堂・茶席等からなつてゐる。当  
初生徒会執行部は、弁論的行事を文化  
祭の中核にすえたいと考えていたが、  
生徒総会で否決され、これは生徒の自  
由参加による影の薄い行事となつてし  
まった。二年各ルーム出し物の中に研究  
発表的要素が二、三あつたものの、文  
化祭全体としてはやや娯楽性が強いも  
のとなつたのは残念であつた。  
次に体育祭である。体育祭の中心的  
プログラムは三年各ルームによるペー  
ジエント(野外劇)である。全体的に  
は踊りの要素をたくさん取り入れた躍  
動美にあふれるものが多かったが、首  
尾一貫した筋と風刺的要素がやや欠け  
ていたのが惜しまれる。

事務局(校内幹事)の転出入

Table listing staff changes for the secretariat, including names and their respective periods (e.g., 松本 幹彦(理)高1期, 安来高校校長).

各期たより

松中四十九期(昭和四年卒)

昭四会幹事 中村 栄

第三回全国昭四会松江大会を終えて
島根・鳥取両地区の総会は毎年一回
松江市で開催しているが、今年も東京
地区の要請もあり、次の日程により去
る五月二十六日松江温泉一文字屋ホ
テルにおいて、標記の大会を開くこと
になり、会員八十四名に案内状を発送
したところ、三十六名の申し込みがあ
ったが、病氣などの理由で二名欠席、
会員三十四名のほか、津田君のご令室
を加えて三十五名により盛會に開催す
ることができた。日程は次のとおり、

- 一、集合場所 赤山二本松下へ午後二時までに集合
二、日程
(一) 一四・〇〇〜一四・三〇
記念写真撮影、物故者黙とう、校歌合唱
(二) 一四・三〇〜一五・〇〇
記念館見学
(三) 一五・〇〇〜一六・〇〇
武家屋敷、田部美術館、小泉八雲旧居、同記念館見学
(四) 一六・三〇〜一九・三〇
大会(総会、懇親会)

大会は、出席者のみのものでなく、やむを得ない事情により欠席した者を含む全員の大いなる考へ方から欠席者にも記念写真、会員名簿、物故者名簿および欠席者近況綴りに大会のあらましを添えて送り届けたので、欠席者も大変喜んでくれた。
大会に先立ち赤山に午後一時に集合。まず、畑一夫、田村幸雄両君に、松中のシンボル、丸に十字の校旗を囲んで記念写真を撮ってもらい、ついで、石段下に移り、七十数名の亡き学友の冥福を祈って黙とうを捧げ、最後に校歌赤山健児の歌を岩辺長四郎君の音頭に、声高らかに歌う。
ここより新装の起雲館(記念館)に至る間は、元銃器庫、剣道場、庭球コート、竹藪のあった所で、この界わいは老生たちにとっては、最もドラマチックな場所であつただけに、白髪のお紳士は、そぞろ歩きながら、それぞれ

に往時を思い起し、感無量なものがあつたことであろう。記念館の見学を終えた一行は、赤山の行事の一切を終わり、思い出さぬ母校をあとに塩見郷手に出て、武家屋敷、田部美術館、小泉八雲旧居、同記念館を見学、六道湖畔の一文字屋ホテルに向つた。
総会の前には和田正則君の世話による双松の幕をバックにして記念写真を撮る。総会は尾原会長長のあいさつに引き続き、関東代表の畑君、近畿は松本周二郎君欠席のため、代つて内田礼治郎君がそれぞれ地区の近況を説明したあと、次期大会の開催について協議した。筆者は、次回は東京、松江の中間大阪が適当と考えていたのだが、赤山のも

松中五十三期(昭和八年卒)

田辺 疆

光陰矢の如く月日の立つのは早いものである。昨年五月十五日、第五十年記念大会を挙げて早や一年と三ヵ月が過ぎた。本年は趣向をかえて名所周遊と童心にかへり、花火大会を見ながらの同窓会を八月五日実施した。
周遊参加者九名、正午松江駅前を出発、最近頼に名高い月頭大刀のある風土記の丘、そして岡田山古墳をつぶさに見学した。丁度会員諸君が此の世に生を受けた大正四年の出土品である。七十年を経た今日有名になるとは驚きである。そして最近日立金属(安来工場(筆者の元勤務先))では出土品の分析に大わらわである。
東に園分寺跡、園序跡を見ながら車は一路東岩坂の安部榮四郎記念館に赴く。
八十幾歳の今日元気で製紙業にたずさわつておられる姿は誠に貴重な存在である。当日は沖繩の民、工芸品展が開催されており、特に芭蕉紙復元の恩人として沖繩文化協会会長より感謝状がよせられていた。また柳宗悦、浜田庄司、河井寛次郎、棟方志功、バーナード・リーチ、芹沢鏡介、富本憲吉等との交際の深きを知る。
その後、一行は、一路外中原町にある松江の文化財月照寺を見学する。松平直政公を始め、特に有名な不昧公の廟、そして九代目に亘る松平家の墓所を見て、庭を見ながら一服をいただき、ありし日を偲ぶ。やがていまよみがえる小泉八雲の旧居及び新築の記念館を見学する。今を去る五十年前、松中三年生のとき英語の担任の酒井英雄に引率され、旧居を見学した。そのとき、心と舌の小さな池や書机等、昔の儘を見て感傷にふける。
新築の記念館は非常によくなり今日非常に参観者が多い。特に五十一周年は小泉八雲没後八十年号として、別冊を参集者一同に配布してある。
ついで松露亭田部長右衛門氏創設の田部美術館を見学する。四季折々の茶道具、軸物等、豊富にあり特に当地の楽山様、節志名焼等興味深くまた懐



と松江で開いてほしいとの希望が絶対多数を占め、五年後に再度松江で開催することに満場一致決定したのである。
母校には勿論既に恩師なく、校舎も近代的建物に変わった。ただ老いた二本松だけは今なお厳然とその雄姿を残している。この老松が生きて続けている以上、吾々の母校を慕う心は消えないであらう。私は今さらながら、双松の存在価値を身にしみて感じたのである。

しく拝見した。
愈々本日の総会場臨水亭に入る。総会に先立ち、前回大会より本大会までに物故者三名に對し、黙とうを捧ぐ。
原田代表幹事、松浦関東代表の挨拶に始まり、総会を型の如く挙げる。事務当局より慶弔規定の追加また六十年総会日を提出する。
丁度昭和六十年は日本三大船神事ホランエンヤが、五月十八日(土)松江城山稲荷神社式年神幸祭当日に挙行されるので、総会は五月十八日(土)(時間未定)に決定した。
懇親会に移り、小畑芸能班一行の安来節、どじょうすくいを拝見するうちに、会員一同酔う程に昔の若かりし頃の心境になり、そのうち六道湖上では花火がいよいよ打ち上げられクライマックスに至る。
特に石倉節男君より提案あり、世界の飢えたる民族に寄附金募出動議が出され、全員一致寄附金を集む。
午後九時、予定の如く広島より遠来の池田稔君の万歳三唱を以て、来るべき六十年度の総会まで健康であるようお互いに頑張りことを誓う。
尚、寄附金は八月六日、日本赤十字社松江支部へ贈出した。

松高北校三期(昭和二十七年卒)
同窓会を終えて
森 淳
とほき国よりはるばるとネカリーの河のなつかしき岸に来ませるわが君に今ぞささげんこの春のいと美はしき花飾りいざや入りませわが家にさはれ去ります日もあらはしのびたまわれわがき日のハイデルベルグの学びのさちおほき日の思ひ出を(アルトハイデルベルグ、マイアーフェルスター作、番匠谷英一訳、岩波文庫)
実に青春の日を追憶はすべからず美化され懐かしき日美であるが、また苦惱と後悔にも満ちている。「青春は美しき」「青春彷徨」のりりリズムに生き見つけた者「戀愛三昧」にふけり「地獄」を見た者とささまであるが往時はただ

三十余年前の坊主頭と三つ組髪が一昨年の卒業三十周年記念同窓会で再会を約したと昭和五十九年八月十七日松江東急イン平安の間に集つた。
会の始まる前の一種独特の華やかな雰囲気、知命の年を迎えたとも思われぬ弾んだ会話、輝く眼差し。
やがて開会のセレモニーに引続き写真撮影、開宴。B・G・Mのエレクトーンの調べとともに話がはずみ杯が廻る。
三十数年ぶりに逢つた人、南北両校舎に別れていたので在中面識がなく初対面の挨拶をする人、その昔お互に関心がありながら御縁のなかつた人、同期生同志でめでたく結婚した人等々人さまざま。
同期卒業生七百名余りのうち集いし者九十六名、それぞれの人生を生きて来つたもので三つ子の魂百までとは良く言つていい。運営費の募金をする者、合唱をする者、司会を買つてママイクを放さない者、まことに賑やかな宴ではある。定刻を過ぎてなかなか帰ろうとしない。またの日の再会を約し「大空はるか」「赤山健児の歌」「県立松江高等学校校歌」「市立松江高等学校校歌」「私立松林高等学校校歌」の演奏につき「螢の光」にて散会。
あとは夜の巷へそれぞれのグループで散つて行き二次会、三次会と流れ深夜二時頃迄語りつきなかつた豪者流の追憶とロマンを求めての感傷旅行であり再び逢う日を楽しみに待つてゐる。

松高北高十七期(昭和四十一年卒)
山本 尚 夫
十八年ぶりの同窓会
今年の夏は、全国的に猛暑続きであつた。松江の日中の最高気温が三十五度を記録した。さる八月十一日(土)、夕陽が六道湖に映える黄昏時、西茶町の水明荘に十八年ぶりのなつかしい顔ぶれがそろつた。総勢九十六名。松高北高十七期生の同窓会である。みな若いタイムトントネルを抜けて十八年前に舞臺先生、島重海先生、忌部利夫先生、稲田悦朗先生、片寄(旧姓森脇)康江

先生のいつまでも歳を召されないお元氣なお姿にはおどろかされた。出席者の半数をしめた女性陣は、出席も完了し子供もほぼ就学し、女性としての円熟味を増した年頃のせいであらうか、若さと美貌に艶つばさを加味されて、生き生きと輝いていた。久しぶりに目の保養までさせてもらった。
たくましく成長した男性陣にも、幼い頃のおもかげが残っている。けれども、名前がなかなか浮かんでこない。「オレ元氣か」とか「昔と変わらんネ」といいつつ、お互いに胸の名札に目を落とすシーンもしばしば。
とにかくなつかしい。みんな童心にかへり、はしゃぎまわつた。飛び入りの演芸も始まつた。二時間の予定を一時間も延長し、閉会間際には誰からもなく万歳三唱がおこり、一次会の幕は下りた。場所を移した二次会にも五十数名が出席し、夏の夜を満喫した。さすが亥年生まれ、三次会で午前三時まで飲み明かした輩もいたと聞く。大成と内心喜んでゐる。しかし、一つだけ心残りがある。それは、同期生全員に案内状を出せなかつたことだ。
当初一、二ルームのみの同窓会を考へていたが、「もっと対象を拡げてほしい」という声が多く、急遽十一全ルームの世話人を選び、集まつていた。一ヵ月前である。市内在住者を中心に世話人の知り得る範囲で、電話、往復ハガキで連絡をとつてもらつた。ハガキは二百五十枚発送したが、住所不明・開催日開際などで、特に県外在住の方にはご迷惑をおかけした。本紙面をお借りしておわび申し上げたい。

きびしい暑さがつづいていて赤山にも、さわやかな秋を告げる風が吹き渡り始めました。「双松」第五号をお届けいたします。ご多忙にもかかわらず原稿をお寄せいただいた各位に、心からお礼申し上げます。事務局は双松会卒業生の皆様のご協力をお願いいたします。と共、ますますのご活躍を祈つております。

編集後記